

麗澤教育

第20号

平成26年(2014)4月

特集 寮教育



〈校舎「かえで」中庭にあるハンカチの木〉

『麗澤教育』発刊の趣旨

本誌は、麗澤大学における教育、特に建学の精神を中心とした人間教育について、教職員や学生、部活動の指導者、保護者、卒業生などが、お互いに議論を深め、かつ、それぞれの実践や現状を報告するためのメディアです。年1回発行しています。

麗澤教育 第二十号〈目次〉

フォト・アルバム

学生寮 Global Dormitory 6

〈特別寄稿〉麗澤教育と私 下田 健人 8

〈特集①〉寮教育 15

グローバル人材を育成する
国際寮「グローバル・ドミトリ」..... 中山 理 16

麗澤大学の学生寮—全人教育の理想..... 井出 元 23

ユニット・リーダーとしての1年間..... 早見 大 31

——「自分の考えを生かす」ことを学ぶ

ユニット・リーダーとしての2つの「自治」..... 佐川 千里 34

私にとっての寮内留学..... 武藤 幸祐 37

国際交流の「第2の家」..... 千葉 祥子 39

新しい家族との思い出..... 朴 基良 42

Dormitory Education 佐近志都香 45

寮生活の4年間..... 細川 祥平 48

フロア・リーダーとして..... 天野 芳美・尾田あかり・高橋 亜季
高山 美久・多持翔太郎・久高 聡太
松岡 良治 51

親が見た「寮生の我が子」..... 千葉 法明 58
——麗澤大学の寮生活

子供の成長を実感して..... 炭竈 久代 61

寮生の成長を願い、サポートをする寮事務室..... 丸 知里 63

◇寮生の成長をサポートする..... 加藤 和次・加藤 愛子 67

麗澤大学の寮生活で学んだこと..... 堀内 一史 71

寮生活の経験と麗澤教育..... 濱井 利一 75

「出会い」ということ..... 生方 徹夫 79

——私にとっての寮生活の意義

もうひとつの「女子寮」	84
学生寮のあゆみ	86
——長年培われた伝統を守りながら、新たな体制へ	
田島 正幸	

〈特集②〉

50回を迎えた麗陵祭

麗陵祭実行委員会の3年間で培ったこと	92
「開かれた学びの場」を目指して	95
——黒須ゼミ公開討論会のこれまで、そして今から	
丸 優泰	
12年経った今、麗陵祭を振り返って	99
麗陵祭実行委員会は私の大家族	102
麗澤でしか作れない「絆」を実感した熱き3日間	106
——キャリアセンター「大人のBAR」	
長谷川善仁	
麗陵祭開催一覧	110
紀野 篤史	
片山 大輔	
小澤 桃子	

フォト・アルバム この1年

【第10回 ホームカミングデー】

展示・企画へ込めるおもてなしの心	116
想い出に残るフィナーレを開催	120
グッズに想いを拓して	122
鈴木麻衣子・井上貴広	
吉田健一郎・佐藤なみ子	
三宅 哲治	
岡野 正樹	
永森 久隆	
勝間 翼	
Grand Get Together in 2013	126
地域での活動を通じて見えてきたこと	130

コラム

*寄稿していただいた在学生の学年は、平成二十五年度です。

麗澤大学学生寮 Global Dormitory

麗澤大学の学生寮は、共同生活を通じて「他人を思いやる温かい心を中心とした高いモラルの意識によって自己を律してゆく」学び舎であり、外国人留学生との交流を通して学生各自がそれぞれに国際的な感覚を養い、人間性を高める学びの場でもある。



多目的ホール



グリーン・ビュー・ラウンジ



キッチン



ミーティングルーム



パーソナル・スペース



麗澤教育と私

経済学部長
テニス部顧問

下田 健人



2014年、私が麗澤大学にお世話になって22年目になる。およそ20年の間、私は麗澤から多くのことを学んだが、もっとも強く訴えた教えは知徳一体である。では、知徳一体教育を支えるものは何か。互敬と伝統である。互敬という教えの最もチャレンジなことは、果たして、われわれ教育者が学生を敬うことができるかである。茶髪、ピアス、腰パンの若者を敬えるか、である。このチャレンジングな課題をいただき、日常の教育の中で私は実践するように心がけてきた。

1989年、私は麗澤のキャンパスを初めて訪れ

伝統とは何か

20年余の麗澤教育について、私が書きたいことは数多くあるが、本稿で紹介したいのはテニス部のことである。大学に最初にお世話になった頃、学生課からは是非部活動の顧問になってほしい、と依頼があった。私は、喜んでお引き受けしますが、と答えた。そのときの選択肢はスキー部かテニス部であった。どちらも私の好きなスポーツなので、どうぞご都合に合わせて決めてください、と答えたところ、スキー部は別の先生が希望されたので、私はテニス部の顧問になった。

顧問になった当初、テニス部の黎明期からずっとテニス部を見てこられた宗中正さん（現モラロジ―専攻塾塾頭）にいろいろ教えてもらった。手探りしながらではあったが、大学の部活動に、自分はそのような貢献ができるのか、を追い求めた。私はただ届け書にサインをするだけではつまらないので、下手くそであるにもかかわらず、学生たちの練習に混

た。1992年、国際経済学部が開設される3年前のことである。当時、私は、麗澤大学もモラロジ―もよく分からずにいたが、緑豊かな環境に触れ、心が洗われた。キャンパスを歩くと、高校生がすれ違いに挨拶をした。こんな教育の場がこの世にあるのかしら、と強く印象づけられた。麗澤教育が大切にしている価値観はひしひしと私に伝わった。その後、私は大学に着任し、経済学や労働経済を教えることになったが、当時、大学には麗澤高校や麗澤瑞浪高校の出身学生は多く、彼らをつかまえては、創立者廣池千九郎が書かれた論文と一緒に勉強した。

せてもらった。合宿にも参加した。当時のテニス部員たちは、変な教員が現れたと思ったことだろう。

顧問になり、しばらくたつと次第に要領を得てきた。学生たちとの信頼も深まり、また徐々にではあるが、麗澤教育が目指すところを薄々と肌で感じ始めていた。顧問になって数年後、テニス部の追い出しコンパだっただろうか。私が卒業生に対して発したメッセージは「伝統」であった。当時の私には何かよく理解できないことであったが、どうにも麗澤の大事な教えは伝統のような気がしてならなかった。

そもそも私は、なぜ麗澤に来たのか。慶応義塾大学に入学し、その後10年余、慶応で学んだ。大学院を修了後、日本大学を含め、いくつかの学校で非常勤講師として教えた。私の素直な気持ちは、もうマシモス大学はいいだろう、少なくとも自分が求める教育の場ではない、と感じていた。小さいけれども、魂のある大学で教育をしたい。麗澤大学は、私が期待していた大学だった。慶応や日大にはなく、



テニス部OB会 (2013年11月23日)

麗澤にあるものを求めたかったが、私の曖昧な気持ちは、伝統という言葉に集約した。

読者は不可思議に思うかしれない。私が学んだ慶応にせよ、私が教えた日大にせよ歴史のある大学である。しかし、自分にせよ、同級生にせよ、どれだけ慶応を自分の身体や精神の中で意識しているか。確かに、福澤論吉に対する親近感はある。

る。しかし、福澤の何を学んだのか。慶応を離れて30年になるが、いつか三田のキャンパスに戻りたいと思うことがあるか、という甚だ心許ない。恥ずかしい話だが、慶応大学の歴史を強く認識しているものの、慶応の伝統は果たして自分の身体の中に刻み込まれていない。

私が麗澤教育で叶えたかった夢は、学生、卒業生の中に刻み込まれる伝統である。果たして可能だろうか。私は、よく分からないままに、卒業生たちに伝統を大事にしてもらいたい、とメッセージを伝えた。テニス部の顧問を引き受けて最初の卒業生を送り出して数年たったある日、テニス部の卒業生が、卒業生の組織をつくと行ってきた。名前をROFT (Reitaku University OBOG Forever Tennis Team) という。爾来、ROFTは、麗澤大学テニス部の卒業生を受け入れている。ROFTは次第に活動の範囲を広げ、柏市テニス協会の団体戦に参加し、その後、卒業生の数が増えるにつれて、ひとつのチーム

だけでは足りず、ROFT・B、ROFT・Cが作られた。一人ひとりのメンバーは、柏市や松戸市などを拠点に活躍する。

私には曖昧模糊であったが、大切にできなかった伝統が、図らずも学生たちの手によって叶えられた。もし、読者が麗澤の伝統に触れたいと思うのであれば、それは難しいことではない。毎週日曜日に、大学のテニスコートを訪れていただけはいい。20年前に卒業したおじさん、おばさんから、昨年卒業した若者まで、多くの卒業生が、黄色い玉を熱心に追いかけている。

部内恋愛禁止

ところで、私が20年間、テニス部の顧問として、発したメッセージの一つに、「部内恋愛禁止」がある。顧問になってそれほど長けたたないうちに、私はある危機感を感じていた。すなわち、男子テニス部員と女子テニス部員の恋愛である。テニス部は、男子と女子は別々に練習を行うものの、新入生歓迎

旅行、夏と春に行う合宿や納会などは、男女両部員が一緒に行く。夏合宿などは、朝から夕方まで振り返して、激しい練習をするものの、晩飯を食べれば、大学生はエネルギーを回復する。疲れているだろうという顧問の心配はそっちのけで、部員たちは合宿地である白子の海岸で夜のデートをする。それでも、愛し合う2人がうまくいく間は、苦笑しながら見て見ぬふりをする。しかし、問題はうまくいかなかった時である。ある時、テニス部の有力な選手がテニス部を辞めるといふ。理由は男女間のもつれである。自由に恋愛することはかまわないが、部の大事な戦力を失うことは大きな痛手である。そうだけでなく、若者の部活離れと言われて久しい。セレクションなどの入学試験方法を探らない麗澤にとって、テニス部を希望してくれた部員は宝である。優秀な部員が退部するのを見て、私は遅まきながら「部内恋愛禁止」を言い渡した。毎年、新入部員歓迎会で何度も「部内恋愛禁止」を強調してきた。私は、テニス部顧問として、教育者として成功してい

ないをつくづく思うのは、誰も私の話を聞いていないことである。2014年1月現在、テニス部員同士が結婚したカップルは12組を数える。

部内恋愛は禁止であるが、できてしまったものはいかたがない。ある時期から、日曜日のROFTの練習における私の役割が変わった。「先生、すみません。子供の面倒をお願いします。私たち練習しますので……」。おい、私は子守のために、コートにきているわけではないぞ、と力なくぼやきながら、任せられた赤ん坊を抱くことになる。子供の成長は早い。テニス部員同士が結婚して最初に生まれた子供が言葉を話し始める頃、いつもの練習で、子供の親が「さあ、じいじと遊んできなさい」と言うのを制して、「じいじといったらだめだよ、しもだせんせいだよ」と、何か自分でもよく分からない状況のまま、子守が続く。続々と子供が誕生するようになり、いずれ最初に生まれた子供が、後輩の子供の面倒を見始める。いつしか、テニスコートが保育園のようにになる。最近では、小学生になった最初の子供

が一端にラケットを握り、「先生、試合をお願いします」などと言う。

年2回、テニス部の卒業生は一同に会する。一度はホームカミングデイに合わせて開催されるテニス部のOB会であり、いま一度は、12



OB・OGの子供たち、卒業生と

月30日のROFTの忘年会である。テニス部員の中には、卒業後テニスを日常的に続けない卒業生も一定数いる。毎年秋に開催するテニス部のOB会では、日頃の練習には出られないものの、OB会には必ず出てくれる卒業生もいる。現役生は、大学テニス部最大のイベントである夏リーグ戦の成績を含め、年間の活動状況を冊子にまとめる。宗さんと私

は、OB会に寄せて一文を書かせてもらおう。

儂い夢、果てない夢

麗澤大学テニス部には、一つの大きな夢がある。昇格である。私が顧問を引き受けて以来、男子は関東リーグの7部リーグに、女子は同じく5部リーグに所属する。バレーボール部やバスケットボール部とは異なり、体育会テニス部の関東リーグは、男子は7部、女子が5部までしかない。つまり、男子7部、女子5部は、「その他大勢」という意味である。男子7部にはおおよそ100大学が、女子5部には、おおよそ70大学が含まれる。その他大勢リーグで昇格することは並大抵のことではない。蟻地獄に陥った蟻のごとくである。実に予選リーグに全勝した上で、本戦に進み、トーナメントで5回勝たなければ上位リーグとの入れ替え戦に臨めない。

上述したように、麗澤大学テニス部は、入試においてセレクションを行っていない。セレクションを行うことには賛否両論あるだろう。しかし、私は、

セレクションに対して消極的である。理由は様々だが、一つの理由は、私立大学が持つ理念を尊重するためである。まず麗澤大学に入りたい、という希望を大事にする。次に、テニスをする。つまり、テニスを強くしたいがために、麗澤を知らない若者を安易に受け入れない、という姿勢である。顧問になって、しばしば麗澤にセレクションはないか、という高校生からの問い合わせを受けた。そのたびに、私は、受験してください、とお願ひした。

私は20年間、テニス部が昇格することを夢見ていた。まだ叶えられない夢である。果たして儂い夢か。昇格することは名誉であり、大学として誇りとなる栄誉である。

自分の国、自分の組織、自分の大学、自分の家族、否、他人のために生きるとは何か。大学の名誉のために誠を尽くすとは何か。私は自分を犠牲にして人の幸せを願うという気持ちは分らない。自分が幸せでない人が人の幸せを願うこと、叶えることができるだろうか。人は自分の幸せのために生き

る。上部リーグに昇格することは大学としての名誉であるが、人ひとりの人生を見たらどうだろう。確かに、過去の栄光はしばしば人生を酔わせることだろう。甘美な酒は美味しいかもしれない。しかし、一夜の夢の実現は果たして心や体に刻まれた伝統を超える美しさを持つだろうか。いずれ父親は子供に語るだろう。いずれ年老いた老人が孫に語るだろう。お父さんは、おじいさんは、素晴らしいプレイヤーだったのだ、と。果たして子供や孫は、いつまで親の過去の栄光の話につきあってくれるのか。伝統とは一人ひとりの幸せの上に構築される。昇格の夢は叶えられずとも、必ずや麗澤の伝統は守り継がれると信じている。

一人の戦い人として

いま一度、毎週日曜日に話を戻そう。テニスは残酷なスポーツである。ハンディキャップがあるわけではない。コート上に立てば、老いも若きもない。常にガチンコ勝負である。体育会テニス部である。

卒業しても同じである。勝たなければならない。趣味でテニスをしているわけではない。戦い続けるために、テニスをやる。私はいつしかROFTのメンバーに入れてもらった。確かに、心優しい教え子たちは、時に私に気を遣い、時に私のプレーを褒めてくれる。しかし、勝負は勝負である。

誰でも55歳になれば分かるが、頭で判断したシナプスが、ラケットを持つ手に伝導するまでに、思いも寄らないほどの時間を要することがある。振り遅れたラケットのフレームに当たったボールが、相手コートはおろか、突拍子もない方向に飛び出していくのを、20代の若者は不注意に大笑いし、私も「あれ、どこ行った」などとぼけて見せる。心はずたずたに引き裂かれても、次のプレーに移るのをためらう時間はない。

私は、テニス部顧問であり、いつしかプレイヤーになった。一人の教育者として、一人の戦い人として、互敬を通じて麗澤の伝統を築きたい。私の果てない夢である。